彙報

◉國勢調査

「國勢調査」は豫期の如く大正九年十月一日午前零時の狀態に於て行はれたりセンサスは羅馬時代にはセンソルの任務をいひしものなれるが、近代は一定地域に於ける人口の調査をいへば之を「國勢調査」といふに於て市郡等のセンサスに此の語を用ゐる難き憾あり寧ろ臺灣の如く「戸口調査」と云ふを適當とすべしセンサスに依りて國民の總數、世帶數及び種族別、年齡別、性別、職業別婚姻關係等の正確なる數を知ることは、國家の政治、經濟、財政、道德、法律等の政策上緊要なるは言ふを須ゐざる事にて、歐米にては瑞典が一七四九年にセンサスを行ひたるを始めとし米國の一七九〇年、英、佛の一八〇一年、普魯西の一八一六年、和蘭の一八一九年、獨逸關稅同盟區域の一八三四年、瑞西の一八四一年、白耳義の一八四六年等之に次ぎ露西亞が一八九七年に只一回之を行ひたるのみなるを除けば概ね十九世紀後半以來每十年に之を行ひ英國の如きは印度及び主要殖民地に之を及ぼし殊に印度にては一八六七—七二年の第一回センサスに於て以前の推定人口よりも六千萬人多數なることを發見し世界の學界を驚倒せしめたり我國にては臺灣にて治政の必要上既に二回(明治三十八年大正四年)之を行ひたる外、內地にては今回が始めてなるは之を歐米に比べて百餘年も遲れたる憾みあれど兎に角開闢以來の劃代的事業と云ふべし從來我國にて每五年の歲末日附にて調査發表せる「現住人口」なるものが如何に不正確なるかは明治四十年東京市に於て施行せるセンサスの結果が當時の戸籍による「現住人口」に比して五十二萬人少かりし一事を以て證し得べし

偖センサスの結果に就て吾人の攻究すべき事項は(一)人口數及び人口の分布、卽ち人口密度の行政的、地形的(Topographical)、高距的(Orographical)分布、例へば何郡、何山脈、何火山、海岸を距る何粁の地の人口密度、又は海拔何米の地の人口密度等、交通機關と人口密度との關係、例へば汽車又は電車の沿線何粁以內と以外との人口

密度の相違(二)都鄙人口の比較及び都會の密度、(三)職業別人口卽ち之によりて如何なる產業が幾何の人口を養ふかを知るべく(四)性別人口比較卽ち之によりて例へば養蠶及び生絲工業地に如何に女子の多きか採鑛、冶金等の工業地又は他鄕人移入の盛なる地に於て如何に男子の超過すべきかを知るべく之等を研究して地圖上に示さば新に各種の研究資料を得らるべし吾人は今よりセンサスの報告を期待すること切なり尙ほ歐米諸國にては戰時中大抵センサスを行ふ能はざりしも昨年又は本年は大底前回より十年目に當れり其の結果が發表せらるれば戰爭の慘禍の如何に深刻なりしかを知る好資料たるべく由て戰禍を免れたる本邦と比較するも興味深きことなるべし既に發表されたる墺地利の昨年のセンサスの結果は同地域の一九一〇年の人口に比して五%を減じ米國にては同期間に一百%を增加したり此の一例の如きは實に好箇の參考資料たるべし。〔下田〕

◉滿濟准后日記出版の完成

京都帝國大學文學部に於ては先年來其叢書の第四として滿濟准后日記の出版に着手し先きに帝國圖書館の架藏に歸して世間一部の副本すらなき滿濟の自筆本に據り應永十八年より同二十九年に至る迄を第一卷として印刷を了したりしが爾來引續き其工を進め今回第二第三卷の續刊成りてこゝに本書全部の出版を完成するに至れり第二第三卷は並びに醍醐三寶院の所藏に係る滿濟の自筆本に據り第二卷は應永三十年より永享元年に至り第三卷は永享二年より同七年に至るものとす滿濟は將軍義持義敎の信任を蒙り內治外交一として其顧問に備らざるはなかりしかば此時代に起れる京鎌倉兩公方の不和と和睦、持氏の武田氏征討、義持薨去後に於ける管領諸大名の義敎擁立、小倉宮の御出奔と御歸洛、義敎の篠川以下關東諸大名の操縱、大內氏と九州諸大名との抗爭、義敎の富士見旅行、遣明船の歸朝、明使の待遇より幕府の米價調節、米商の反抗、土一揆の蜂起等政治上社交上の重要なる史實を收め室町時代初期の文化を徵すべき屈竟の資料とす只原本は國寶なるが故に學者の利用に便ならざるの憾ありたれば本書の公刊は學界に寄與すること鮮少にあらざるべし本書一部三卷菊版約二千二百頁今般發行所六條活版製

造所より定價金貳拾圓を以て發賣すといふ〔三浦〕

◉第六回大藏會

去る十一月七日京都府立圖書館に於て京都佛教各宗學校聯合會の主催として第六回大藏會を開催したり今その概況を述んに陳列品は第一活字本の部と第二傳教大師に關する圖書との二門に分たれしが前部門に於て注意を喚びしものは彷高麗本大藏經（慶長十八年より元和三年に至るまで宗存の開版するところ）を筆頭に朝鮮の刊行本としては大德寺藏の金剛般若經五家說誼二册に指を屈せざるべからず陳列の順序は刊行年時を追ひ寛永以降のものには多少の取捨を加へたれども文祿慶長元和の年號あるものは各宗の典籍に亙りて殆んど網羅せられし觀あり中に於て平假名活字を用ひたる和風安心鈔二册（眞宗大谷大學藏）等珍しきものといはざるべからずなほ版本の外、毘沙門堂、圓光寺、東大寺圖書館、京都帝國大學より活字版に關する資料の出陳ありしは恰好の參考品たりき

次に第二門に於ては傳敎超筆の大師講像（園城寺藏）天台祖師曼荼羅（立石寺藏）等の影像類、延曆寺及び來迎院藏の國寶となれる大師の眞蹟類をはじめ、傳記類としては妙法院藏の血脈譜、慈眼堂の破邪辨正記、惠心院藏の一心戒文、石山寺藏の叡山大師傳、高野山寶壽院藏の日本法華驗記等何れも史料としての價値を有し、目錄、撰述の類にも亦稀覯のも尠からず靑蓮院吉水藏の山王院藏二帖、八家秘錄一帖、東寺三密藏の八家秘錄一帖、學生式及び問答、同金剛藏の正像末文、依憑天台集等の中には大師全集の校訂を促すが如きものあり終に山王神道に關する一類を特に設け蓮華寺藏の日吉山王靈驗記二卷（國寶）等の陳列ありたり

同日正午よりは市公會堂に於て傳敎大師の御影供を行ひ引續き新村博士の「日本舊時の活字版本」姉崎博士の「傳敎大師の時代と理想」と題する講演ありたり〔會員橋川正氏報〕

◉京都帝國大學文學部史學科々外講義

京都帝國大學文學部に於ては學年短縮の爲め之が補講の意味を以て科外講義を開く事となりしが史學科に於て

此全文は一五五頁上段史學研究會記事文學博士濱田耕作君の次に追加す

法隆寺金堂になる藥師三尊が釋迦三尊の東方に安置せらるゝは藥師如來が東方淨土の主なる爲なりとの說の信じ難きを論じ其の作者の鳥佛師なるべきを說き法隆寺大鏡が釋迦三尊と樣式、手法に差異ありとなし鳥佛師說を否定せるを貶け美術批評家が主觀的標準を以つて濫に作者鑑定を左右するを非難し此の佛像及び當時飛鳥時代の佛像が四十八體佛及び支那六朝時代の小佛像より導かれたるものなる事を說き更に此の金堂の佛壇が四方より觀得るが如くなれるは壁畫と關係あるものなるべしとなせり。

は東京音樂學校長にして東京帝國大學文學部講師なる文學士村上直次郎氏を聘し十一月五日より同二十日迄十四回に亙りて「葡西貿易と基督教の傳來」なる講義を開けり學士は先づ現代語に混入せる葡西兩國語と羅馬舊教各派の梗概とを述べて緒論となし本論に於ては葡西兩國人渡來の由來、日本との交通貿易及基督教の傳來と其の布教の狀況、フイリッピン及濃毘數般との交通、大友義鎭伊達政宗の遣使の顚末、和蘭及英吉利人の渡來と貿易、家康死後外交方針の一變、基督教の禁壓、島原の亂、及鎖國の諸項につき學士が往年親しく採訪せられたる歐洲の史料等を引證して講述せられたり。

◉史學研究會

例會　大正九年九月二十四日午後一時半より文學部第八教室にて開催左の講演ありたり

一、法隆寺金堂藥師三尊佛像に就きて

文學博士　濱田　耕作君

一、歴史哲學者としてのヴィコと愚管抄

文學士　松本彦次郎君

西暦千二百二十五年に書れし愚管抄は凡そ二百二三十年を經て一條兼良によりてその原理たる「道理」の幾度も繰返されたるを怪まれたるまゝ、明治時代に至るまで、その眼目たる歴史哲學は研究されずして終れりヴィコの著新科學は世に出でゝ九十餘年の佛國史家ロマンチスズムの曉將ミシュレにより飜譯せられ始めて史界注意を集めたり、日本と伊太利との兩名著がその製作時代前後に眞の價値の認められざりしも一奇と云はざるべからず前者は佛教の哲理に基き、後者は基督教を出立點とせり慈圓は史的生活は繼續性なるが故に、其表現法は詩歌的藝術的のものなりとの主張の下に外國文を排し國語を以てかくべきを力說し、道理が史生活を一貫する原理なりと論ぜり。ヴィコは言語の研究により、各國の神話傳說慣習を比較し、宗教、政治、經濟等の社會現象を綜合して文化史的に時代分けをなし各國民の心理を論じ、東洋にまで及びポエニ戰爭時代のローマと日本とは共に宗教に基く英雄國なりと云へる彼は最近に至つて民族心理學及社會學者に重せられてゐる。數年以來我國で研究されつゝある獨逸南方派の新理想主義の歴史哲學は我史家

に大なる歴史と我史家の著作とには餘りに距離がありすぎ慈圓もヴィコも史生活を具體的研究し、文化發展の徑路を論じ、その歸着として歴史哲學に及べり。現時の我史學の立場よりせばこの研究法は先きに注意せらるべきものなるべし。

茶話會　大正九年十月二十四日午前十時より文學部第五教室に於て本會茶話會を開き過般歐洲より歸朝せられたる會員小川理學博士の將來品を陳列展觀し午後一時より左の講演あり。

一、フンボルトの著書及び其の他蒐集圖書に就て

理學博士　小川　琢治君

余は昨秋歐洲に至り獨逸に入りて諸種の機械圖書を求めたるが有用の書は極めて少く甚だしく失望せしが却て道樂書の方面に於て豫期以上の成績を擧げたり、其の内フンボルトの全集三十卷は最も余の好奇心を滿足せしめたるものにして此れ等の書は彼が其の畢世の努力を致し其の全財産を投じ更に當時に於ける最も有名なる碩學の助を藉りて漸く出版するを得たるものにして其の内最も有名なるを南米旅行記とす。此れに由りて文化が地理的に如何に分布したるかを明かにしたるは彼が最大の功績に數へざる可らず、若し其れコスモスに至つては其の量は遙かに南米旅行記に及ばずと雖も而もラボアジエー、アラゴ、ラプラス、キユービエー等の碩學を輩出せしめたる當時の空氣中より生れたるものにして當代の代表作と稱すべし。次に此の古地球儀は利瑪竇萬曆三十年の萬國輿圖並びにオルテリウス、メルカトル等の輿圖と比較し尚其の他の事情を合せ考へて一五八〇—一五九〇の年頃のものなるべく其の水平輪に記せる風の方向の命名によりて明かに伊太利製なる事を知る次に希臘羅馬の地理書の主なるものに就て一言せんにソリヌスの世界志はアピアン之れを訂正しアメリカの名を記入せる最初のものなり。終りに一言せんに歐洲に於ける地圖の製作は今や獨逸より移つて英國に入り英國は一躍製圖界の覇權を握るに至れり。云々

當日出陳の主なるものはフムボルトの南米旅行記以下トレミー、ポムポニユース等の古代地理書、古地球儀等なり。

總會　大正九年十二月二十八日午後一時より京都帝國大

學々生集會場にて本會本年度總會を開く、先づ評議員庶務擔任文學博士濱田耕作君會計の報告をなし次で本誌研究欄所載の左の講演に入る。

一、愚管抄の研究　　文學博士　三浦　周行君

右終りて評議員十名の改選を行ひ、更に左の講演に入る。

一、四神の起源に就て　文學博士　白鳥　庫吉君

四神は人格を有したる神に非ずして一種の鬼神、又は魂の意なり之が記錄に現るゝは戰國末に初まるも專ら重視せられしは漢代以來なり、四神と關係深き四靈の中、麒麟、鳳凰等は何れも陰陽說より理想化せるものにして、蓋し鹿の一種、鶴鷹の一種がそれ〴〵麟鳳の原形動物なるべく、龍は卽ち鰐魚か蜥蜴か蛇かなるべし。而も龜を除く三種は西域より傳來したる思想にして殊に龍傳說は我が邦にても八股大蛇傳說となり一種の洪水傳說として存し、蓋し Chaldea より支那に傳りしは天文學に伴隨し蛇、鳳凰、麒麟はそれ〴〵地下、天上地上の精として現れたもの、如し。支那の易は蜥蜴の蜴にして一種の占法なり。之と共に靈視せられたる龜は陰陽の雌雄相配する說より此の地下の精なる蛇と相和して玄武となりぬ。西域に於ける麟が支那にて白虎となり鳳凰の朱雀と變ぜしは現實を尊ぶ支那人の通弊として實在の動物を代入せしのみ。而も四靈思想は轉じて神人思想となり西王母東皇父を生じ遂に漢鏡の上にてＬＶＴなる模樣が方を示して陰を代表し乳が圓を示して陽を代表するに至れり、仍陰陽思想は夙に堯典禹貢に現はれ五行思想は戰國に盛なりしもの、如く、左傳のの獲麟の記事の如きは之より兵氣動くことを云へる五行家の記述に出でたるものにて左傳は占星家の著述に出づるが如し。云々

終了の後午後六時會員晩餐會を階下食堂に開き懇談數刻午後九時散會せり。當日は白鳥博士本會講演の爲め東京より來會せられ、聽衆亦實に一百三十人にて盛會なりき。

●支那學會

例會　大正九年十月七日午後六時半より文學部第八教室にて開催左の講演あり

一、滯支所見　　文學士　佐藤　慶治君

一、鄙康節に就て　文學博士　高瀨武次郎君

佐藤學士は其の滯支二ヶ年間の旅行談感想談を述べて將來品を展觀し高瀨博士は伊川擊壤集に見ゆる「須探月窟方知物未蹯天根豈識人」なる詩の月窟天根に就て論議せられたり。

大會　十一月二十七日午後一時より京都帝國大學々生集會場階上に開催左の講演あり。

一、唐の十道に就いて　文學士　井上以智爲君

二、小說の溯源と神仙說　文學士　青木　正兒君

三、支那に於ける藏書事業　文學博士　鈴木虎雄君

四、高麗記及肅愼國記　文學博士　內藤虎次郎

此內高麗記は翰苑に引用せらるゝ遺珠なるが內藤博士はこれが新舊唐書の高麗に關係する記載の史料たりしは疑ひもなければ蓋し唐初の作に出づるものならんかと論ぜられたり。來會者百十名、午後六時晩餐會を開き午後八時散會せり。

◉讀　史　會

例會　九月十六日午後六時より學生集會場に於て開催出席者三浦喜田教、授西田助教授、名越、江馬、魚澄、富森、下川學士及び岩橋、島田、源、江藤、井川諸君にして名越學士は偶朝鮮より出張滯洛中なるを以て出席せらる、初めに新入會員の紹介ありて後左記の講演あり。

一、國史上に於ける怨靈思想　文學士　魚澄總五郎君

怨靈の祟と云ふ思想は何れの民族にも共通の思想にして、日本に於ても觸穢を忌む思想の如き亦これに起因するに似たり。佛教渡來後未來思想の傳播すると共に怨靈思想も顯著となり奈良、平安時代の如き歷々之を史上に徵すべく鎌倉時代より室町時代に至る戰亂頻りに相次ける時代は特に甚しきを見る。南北朝時代元弘の亂後怨靈思想の盛なりし事太平記等の軍記類を繙かば隨處に之を發見すべし辻博士が史學雜誌上に尊氏の信仰を敍して其の人物を辯護せられたるも彼れが敵の怨靈を怖れたる丈彼の人物の惡辣なりしを證すべきに非ずや高野山に於ける朝鮮人供養の碑に見ゆる思想も亦之れに過ぎず云々

一、青摺に就いて　文學士　江馬　務君

青摺とは衣服の文樣の染方にて萬葉集等によれば榛の皮に山藍の葉、萩の花、杜若等にて凸面の型木の上にはりつけし者を呼きつけるものにして捺染の一種と云ふべし此の方法は陸奥のしのぶもぢずりの如き石面に文樣をつけたりし事實より見れば必ずしも外來の方法に非ざる如し其の沿革は記紀に散見し早く仁德天皇の時に始まるが如しもと朝廷に於て節儉の主旨より着用せられしが藤原時代に於ては其の淸素なるを愛して朝服の上に用ゐるに至り所謂小齋の服とはありたるなり云々として實物を示しつゝ說明せられたり。

一、外來思想と國史

文學士　名越那珂次郎君

國民思想の善導は敎育の力に依るべく特に歷史敎育を以て最も適當とすべしとて我國史上外來思想の輸入せられし各時代を略叙し常に其の取捨を誤まらざりし事實を述べ歷史敎授が公平なる批判力を與ふる事を說き國史敎育の必要殊に外國史の敎授の國史的立場よりすべき事の必要を切言せられたりそれより談笑に耽り九時半散會

例會　十月二十二日午後六時より學生集會場にて開會出席者三浦敎授、魚澄、桑原、鈴木、富森、下川の諸學士其他學生數名あり大會及旅行に關する協議ありたる後左の講演あり九時散會せり。

一、向日神社の座に就て・　六人部克己君

向日神社の座に關する記錄の最も古きは天正時代のものにして少くとも天正以前に其の起原に存せし事明也年頭座、索餅座、神役座等の種類ありて各座又數座に區分せらる。之れ神事に於ける勤仕の別によるなり各座には共有の不動產を有して其收入にて祭費を辨じ餘剩は互に分配し又祭事に於ける座位を嚴格にし長老を尊敬し、各座相互及座仲間に於ける親睦の厚きは特に注意すべく現今尙此制度の名實共に保持せられつゝあるは興味なき能はず云々

一、愚管抄の著者　文學博士　三浦　周行君

本講演は遂て詳細史學研究會大會に於て發表せらるべき筈なるが故に茲に之を略す

修學旅行　十月三十一日午前七時五十分秋空高く晴れたる時京都を發し播磨旅行の途に向ふ一行は三浦敎授、魚澄、古田、桑原學士及び六人部、中村、源、江藤、井川

島田の諸君なり十二時四分加古川驛にて輕便鐵道に移り數分にして北在家なる鶴林寺に着す。四邊閑寂にして堂塔點綴せられ歴史の匂ひこゞ深し藤原時代の壁畫の面影を殘せる太子殿以下の特別保護建造物、朝鮮傳來の古鐘を巡覽したる後本堂にて國寶慈惠大師畫像、聖德太子傳繪等の繪畫及び古文書等を見る。古文書は文永五年の寄進狀最古こし信長秀吉の禁制赤松浦上の書狀等注意すべきものなきにあらず。午後一時こゝを辭して半里の野道を徒歩加古川驛に出で乘車綱干に達し電車に移乘して鶴村なる斑鳩寺を訪ふ。鶴林寺こ共に德聖太子の御領に建立せられし所仁王門前の松並木に法隆寺の面影を偲ぶべきも堂舍は天文燒失後の建立に係り古建築の觀るべきものなし先づ八角の太子堂に束帶の太子像を拜し、講堂に釋迦、藥師、觀音の國寶木像を見る。古文書の見るべきもの無かりしこ雖も、應永以來の記錄には兵庫島の修築、土一揆の德政、一向宗念佛道場の禁斷の如き史學上注目すべき事項尠からず黄昏して姫路に至り客舍に就く翌十一月一日雨もよひの空なれこ降りもやらず午前七時半出發播磨史談會長矢内正夫氏の東道に依り姫路の北郊里餘に聳ゆる廣峯山に登る急坂十八丁を窮むれば播州平原の秋を一眸に收め遙に内海を隔て、四國の山を望む廣峯社は京都祇園の本社にして山麓は往昔朝鮮移民の本居たりしが如し社務所に於て古文書を披閲す建保四年八月の幕府の御教書以下社領に關するもの多く足利時代に於ける地方社寺の狀況を物語る史料亦尠からず社司廣嶺氏の歡待に接し、山上の殿舍等を歴覽したる後午後二時下山姫路に歸りて白鷺城に登臨し城内を一巡して午後五時十四分京都行の列車に投じ歸途につきぬ。

村上直次郎氏歡迎茶話會　十一月十八日午後六時より本會主催こなり學生集會場に於て、科外講義の爲め入洛中の文學士村上直次郎氏を聘して歡迎茶話會を開く。會するもの村上氏を始め原、新村、三浦、坂口、喜田諸教授、魚澄、牧、鈴木、桑原、安藤、鶯淵諸學士及史學科學生等二十餘名なり三浦教授の挨拶の後村上氏は南歐に於ける日本關係の史料に就て氏が外遊中親しく各地に探訪せられし當時の實歴談を述べられ尚外國文書殊に西班牙文書に見ゆる一種の花押ルブリカ及び文書用紙或は封印に關する研究等に就て參考書を示されつゝ興味深き說明を

試みられたり。それより同氏を中心として歡談湧くが如く九時半散會せり。

第十一回創立記念大會　十二月四日土曜日午後一時より學生集會場に於て開催す。本年は講演に專らならん爲め史料の陳列を廢し、文化問題を中心とする會員各自の研究を發表したり。來聽者約二百五十名にして盛會を極め午後六時閉會せり。講演後階下の別室に移り會員の晩餐會を開き各自の意見の交換をなし和氣靄々の中に八時散會せり。出席者三浦、喜田の兩教授、江馬、魚澄、中村、古田、牧、富森、桑原諸學士、栗野、牧野、米澤、岩橋梅原、島田等諸君及學生數名

一、天平時代の文明　　橋川　正君

天平時代は唐制模倣時代と稱せられ唐朝文化の崇拜は當代の一特質なるが更に他面から見る時は實に國家的統一時代にして法制の制定、國史の編纂、風土記、地圖の提出、國分寺の造立、其他文學美術に於て外形は唐朝模倣の如きも內容を考察する時は日本固有の文明の發展し來れるを見るべく次代の文化の發達を促進せしめし原動力なりき云々

一、末法說の信仰　　文學士　富森　大梁君

鎌倉時代に於ける平民佛教勃興の根本的要素は末法說の信仰なりとて傳教の末法說を紹介し愚管抄の後三條天皇の條に「世の末の大なる代り目」との句及傳教の正像末記の說よりして末法は延久四年に始まれる事を述べ此の豫言的思想が保元平治の亂等によりて實現せられ來り社會的不安を濃厚にし國民の宗教的要求に傾き來りし事を說かる。

一、近世に於ける地方の自治　　文學士　中村　直勝君

近世の封建制度に伴うて各藩に於ける民治は產業の發達せる地方、交通上の要區、物質の集散地等各その趣を異にすることより、其一特例として近江國粟太郡志那村に於て村民の地主が神社修理の目的の爲め宮講を組織して上は社家の專橫を妨げ下は百姓を制しつゝ氏神を中心として團結し村治を行ひし事實を擧げこれを說明せらる

一、德川時代の大名と產業　　粟野　秀穗君

應仁亂の經濟的衰頹は江戶幕府の確立と共に產業の發達を促したるが之れ一は幕府及大名がその權威の發展及

維持の財源として新田開發、鑛山採掘等に努めし結果にして秋田藩の小坂銀山に於ける亦此一例なり、然るに參覲交替及幕府の土木事業による各大名の財政の窮乏は之に産業の發達を促し仙臺藩に於ける仙臺平馬匹等の産出の如きかゝる結果によるものなり云々

一、少彦名命　　文學博士　喜田　貞吉君

初に大國主命と共に國土經營に從事せられし少彦名命の傳說に就て說明せられ、此の神の一名クシの神のクシは千島アイヌの稱なるより此の神のアイヌ系の神なる事を論じ、我神代國土經營は所謂出雲民族以外多民族の經營によりし事を說明せられたり。

一、鎌倉時代の婦人問題　　文學博士　三浦　周行君

上古以來の男女關係より男尊女卑の固有のものにあらざることを說かれ鎌倉時代の婦人の狀態はその智識信仰より婦人の地位男子に劣る事なく幕府は法制上婦人の權利を認め且つ御家人としての義務をも負擔せしめ必ずしも男子と遜色なかりしことを例證し最後に現代婦人問題に言及し敎育と體育との外財産を有せしむることが此問題の解決の根本的要件なる事を述べられたり。

◉西洋史讀書會

例會　十一月十日午後六時より學生集會場に於て開く、原、坂口兩敎授、中村、植村兩講師初め卒業生學生十餘名來會せり、席上左の紹介ありたり。

一光榮の市アンチォーク　　小牧　實繁君

ナショナル、ジオグラフィック、マガジン、第三十八卷第二號にウイリアム、エチ、ホールが記せる所によればアンチォークは紀元前第四世紀の初め、セリウコス、ニカトールに依つてカシウス山の北方オロンテス川の南岸形勝の地に建設せられ、次で紀元前三世紀モリウコス三世(大帝)によりて南方に增設せられ、更に紀元前二世紀に至りセリウコス、エピファーネスによりて東方に擴張せられしがオロンテス川に沿へる東西の大路と之れに直角に交る南北の大路とは恰も市の中樞を形成し、之れに平行せる幾多の街路四方に走り、殿堂宮殿貴族の邸宅等軒を並べて榮え、所々清泉の湧き出づるあり浴場の清美なるものありて、夜は街々晝日を欺く光明を以て飾られ

街路の兩側には石柱の林立するありし車馬道を限り、人道を保護す。更に西方の郊外にはダフンの谷ありてアポロの神を祀り其の傳說の甘味と其の風物の美とは相俟て人々をして次第に崇拜儀禮に託して逸樂に走らしめ後世羅馬軍人の士氣を墮落せしむる事大なるに至れり。降つて羅馬の支配の下に於てこの市は更に隆盛の度を增し羅馬東方政府も又此所に置かるゝに至れり。然るにアンチオークには古來屢々震害あり、加之時として奪掠虐殺等の行はるゝありて其度毎に回復せられざるにはあらざりしも、かの六世紀ペルシヤ人侵入後は又昔日の壯觀を止めず、羅馬時代人口五十萬を有せしもの今や僅々三萬に足らず。然りながらアンチォークは東方曠漠たるメソポタミアの大平原、農產物の大寶庫を控へたる上、此れが西方への自然の捌口は今バグダッド鐵道により君府に至る長路にあらずしてアレキサンドレッタを經て地中海に出づる短路なれば將來或は再び復活する事もなしとせず云々。

一エラスムスに就て　三喜田熊藏君

「英國歷史評論誌上揭載」

先づエラスムスの生年の異同につき、之に對する意見を述べ考證する所あり。次に彼に對して、概括的觀察を試み、その個性を說き、諸國遊歷の生涯を述べて、彼のコスモポリタン的なるは全くその境遇の然らしむる所なるを指摘して本論に入る。彼の青年時代の條に於ては、パリー大學遊學中の彼の修養を述べその壯年時代に轉じ一四九五年渡英後當時の名士就中ジョンコレット、サートーマス、モーア等との交遊、一五〇六年後の伊太利遊學再度の渡英後の彼の生活に及び、併せて有名なる諷刺的著作「愚の稱讚」成立の由來及びその內容、世界最初なる希臘語ニユウテスタメントにつき興味ある說明あり最後に彼の晩年の條に於て當時の內外の狀勢、時代と彼との交涉、宗敎改革の氣運、それに對する彼の特種の地位及びそれにつきての彼固有の意見を詳說し再び彼の個性を批評しルーテルのそれと比較を試み彼がルーテル等と行動を共にする能はざりしは全く彼の經歷と個性—內容的な性質判斷力の確實完全なる常識偏見を超越せる知力にありとし結論せり。

●歐米史界

過去大戰中の獨逸史界　アメリカ史學雜誌昨年七月號の試上に Antoine Guilland, German Histor cal Publicat ons. 1914—1920 の一篇を掲載し居れり Guilland氏は先般「現代獨逸と其の歴史家」の好著を公にし廣く讀書界の歡迎を受けしを以ても知らるゝ如く獨逸史界の現狀に精通せる學者にして現に瑞西國チューリッヒに史學教授の職にある人なり。されば本篇は戰時に於ける獨逸史家の業績を通觀し彼地史學界の最近狀勢を容易に且的確に承知せんと欲する人々の要望を充さしむべき好文字と稱して可ならん。今左に氏の論述せる所に據りて大戰中に於ける獨逸史學の瞥見を試み讀者の參考に資せんとす。

戰時中史書の刊行が戰前に比し其量に於いて減退を來たし居れるは交戰國通有の現象にして獨逸史界も亦其の數に漏れず諸學者は孰れも現代の問題に執着するを免れざるが故に從來彼等が得意の壇場となせし古代史中世史又はルネサンス期に關する論著の如き特に寂莫たる觀あり。且や頻出せる現代史の方面時局關係の著述に於ても

由來國民の教養指導を其任務となし時代の傾向に支配さるゝこと最も多き獨逸史家の手に成れることなれば其大部分は政治的國民的要望を伴ひて純正なる科學的見地より遠ざかれる嫌ひあり。而も既往七年間を概觀すれば獨逸史學は猶他の學界に於ける如く大戰中に關はらず積年の餘勢を保ち其完備せる諸般の研究機關を用ひて依然相當の業績を擧げつゝありしものといふべく今後戰前に占め得たりしその世界史學界に於けるプライマシーは恐らく最早保有し得ざらん迄も矢張其研究成果や學說は斯界に重きをなすべきは疑ひなき所ならん。吾人はこの機會に際して獨逸史家が既往に於いて國民的熱情政治的理想に驅られ動もすれば嚴正なる科學的研究を功利的手段の犧牲に供し獨逸國民の浮誇野望を募らしめたる謬想を棄て、嘗ては獨逸史學に千鈞の重きを加へしめたる傳來の純正なる理想に復歸せんことを切に期待せざるを得ざるなり。以下時代を追ひ類に順つて大戰中の主要なる歴史著述を紹介せん。

古代史に於いては先づヘブライ民族研究史の雙絶としてR. Kittel, Geschichte des Volkes Israel. (1917) A. Per-

tholet, Kulturgeschichte Israels. (1920) を擧げざるべからず。前者はヘブライ民族の政治史上の經歷叙述を主眼とすれども其間該民族の宗教生活を重視し且其の發展を世界史の全潮流より眺めて隣邦諸族との交渉關係に留意を忘らざれば同氏の舊著「ヘブライ人の歴史」の改訂版として推奬すべき好著と稱すべく後者は純文化史の立場よりヘブライ族の社會狀態及びその精神生活を討究し舊典籍や最新の資料によつて其實相を活寫せる勞作なり。最近 L, M. Hartmann 氏等の手によつて企てられたる世界史全書(Weltgeschichte) は既に古代期の部分を公にせるが其目的は政治史上の事實を羅列するよりも人類生活の史的發展に對する總觀を示さんとせるものにしてHanslik, Kohn, Klauber諸氏の古代東方史Cicoriti氏な希臘史 Hartmann 氏及び Kromayer 氏の羅馬史の如き各時代分擔者孰れも其方面に於いて造詣淺からざる人々なれば其刊行は學界に稗益する所鮮少ならざるべし。更に是等にも優して吾人の注目を惹くは古代史の一權威たる Eduard Meyer 教授の近業 Caesars Monarchie und Principat des Pompejus (1918) なりとす。本書は氏の名著「古代史」の別冊とも稱すべきものにして著者が戰前着手しつゝありしその第六卷述作の筆を止めて當面の時局に切實なる史的聯想を誘起せしむる羅馬史の革命期に對し精到なる研究を發表せるものなり。氏はかのモムゼンよりも一層冷靜公平に當時の政局を解明せるが如く其史筆はモムゼンの絢爛に比敵し得ざるも一層實質實質愼密なるを覺ゆるなりケーザルを以て社會の救濟者と見做さず其敵手ポムペイに增して敏才剛毅の質を具へたる野心家なりとし、而も二者の抗爭は單純なる政權爭奪にあらで主義理想の爭ひと稱すべく、ケーザルよりも固く羅馬のトラヂションに協合せんと欲せしポムペイの方策はケーザル暗殺後アウグスツスによつて實現せられ結局彼のシイステムは優勝を告げたりとせるは氏が所論の要旨なり。尙この危機に際せる羅馬人の社會生活を描寫しモムゼンが空言を弄する多辯の臆病者と却けたるキケロを以て最も誠實なる時勢の視察者なりと見做せる如き亦注目すべき所なりとす。

中世紀に關しては L. M. Hartmann, Geschichte Italiens im Mittelalter Bd. IV Die Ottonische Herrschaft (1915)

あり。著者は亦本書に於いてもこの時代の政治現象よりは社會的經濟的方面の記述に力を用ひ居れるがかの從來獨逸史家の間に是非の論喧しき中世帝國の伊土支配が祖國に如何なる利害を及ぼせしやの問題に就きても氏はジイベルやベーロウの如き國民史家の見解を却け高遠なる文明史的見地よりこの伊土經略が粗野なる獨逸人の思想中に優秀なる文化を保有する伊太利精神を透入混和せしめたる効果の疑ふべからざるを主張し居れり。F. von Bezold, Aus Mittelalter und Renaissance(1918)はルネサンス時代史殊に學藝の方面に精通せる著者の論文集として文化史研究者の見逃がし難き好著なり。宗教改革の四百年祝祭に相當せし一九一七年前後にはこの時期に關せる書の公刊少からず。就中 G. von Below, Die Ursachen der Reformation(1917) Otto Scheel, Martin Luther (Tübingen, 1916, 17) G. Wolf, Quellenkunde der deutschen Reformationsgeschichte. (Gotha, 1915, 16)の如き特筆すべき著述なるべし。ベーロウ氏が宗教改革の原因に對する觀察は云ふ迄もなく著者獨特の見解を表明し居れる者として注目に値すべくセール氏のルーテル傳中既出二卷は從來新教派

史家の閑却せる其の生立、修學僧院生活、羅馬行の事蹟を究め舊教派學者の研究成果をも利用してルーテル信仰の中世末カトリックとの關係を考察し飽迄公正なる見解を示せる點に於いて尊重すべき勞作といふべくウオルフ氏の史料解説既刊の二册も此種の著者に免がれ難き缺陷は鮮からざるも今後宗教改革時代研究に志す學徒の指針としてその刊行は寔に慶賀すべきことならん。十七八世紀に亙りては只Eugen Guglia の Maria Theresia (1917)が出でたるのみにて他に注目を惹く論著に接せず。

ナポレオン時代に入りてTherese Ebbinghouse, Napoleon, England, und die Presse, 1800—1803(1914) はナポレオンの佛國に於ける言論出版に對する政策が全然抑壓的なりしにあらで寧ろこれを利用せんとするにありしことを當期の史料によつて立證せし興味ある著述なり。 Ulmann, Geschichte der Befreiungskriege (1914) は當時の政治外交關係を多年に亙る精到なる根本史料の檢索討究によつて解明せる著者の苦辛の成果と觀るべきものなり。尚十九世紀の獨逸政治史に關するものとしては普のライン諸州併合紀念の機會に公にされたる此地方關係の述作數種や

Veit Valentin 氏が從來閑却された二月革命當時のフランクフルト國民議會の事情を說ける Die Erste Deutsche Nationalversammlung (1918) やビ公時代の獨逸自由黨の消息を明にせる H. Wendorf, O. Westphal, H. Katsch 諸氏の著述や E. Brandenburg の獨逸帝國建設始末を精叙せる Die Reichsgründung (1916) ビ公研究者として知名の E. Marcks が公にせる Otto von Bismarck (1918) の如き孰れも注目を惹くべき好著ならん。

時局關係の著書中には L. M. Hartmann, Hundert Jahre Italienischer Geschichte (1916), W. Feldmann, Geschichte der Polnischen Ideen in Polen seit dessen Teilungen, 1795—1914 (1917 H. Oncken, Das Alte und das neue Mittleleuropa 1917) F. Salomon, Der Britische Imperialismus (1916) の如き當面の國際的感情に支配されながらも尙比較的公正を失はざる良著として推奬し得べし。尙 Salomon 氏の著書と相並んで英國の殖民政策に對する獨逸史家の穩當純正なる學術的見解を表明せるものとしては Sten Konow, Indien unter der Englischen Herrschaft. (1915) を擧ぐべく V. Valentin, Kolonialgeschichte der Neuzeit (1915) も一般殖民史研究者にとりて必讀の書ならん。

戰時中に出でたる多數の小册子論文中注目すべき物としてはエードワード、マイヤー氏の Das Britische Weltreich (Berlin, 1918 が英國の世界的權勢發展に對して史的觀察を下せるとフォン、ベーロウ氏の Deutschland u. die Hohenzollern. (Leipzig, 1915) が普王室と獨逸國家との關係を論ぜるを其代表として擧げ置かん。知名史家の論文集も此間前後相次いで公にされしが就中ヘルマン、オンケン及びマイネッケ兩氏のもの最も衆目を惹くべし。シエーファー對デルブリュックの論爭を取扱へるウォルフ氏の Dietrich Schäfer und Hans Delbrück Goth. (1918.) と題せる一著の戰時獨逸史家の心意を表明せるものとして興味尠少ならず。

Moriz Ritter 氏は最近 Die Entwickelung der Geschichtswissenschaft an der führenden Werken Betrachtet (1919) なる述作を公にして過去の時代史觀を代表し若くば進んで歷史の過程に系統組織を立てたる斯界の指導的人物及び其著述を中心として史學發展の跡を討究せる結果を發表し居れり。卽ちツキヂデス、アリストートルと其「政治論」ポ

リビウス、アウグスチンと其「神の都府」よりマキヤヴエリー、ルネサンス時代並に十七世紀の史家に及び更にモンテスキユー、ヴオルテール、アダムスミス、ギボン、ニーブル、ランケ、ブルクハルト、ランプレヒトの諸家に亙りて其史觀を論評し居れり。其他尙地方叢書出版中に特筆すべきものなきにあらざれど是等は割愛して最後に只一般史の方面に於けるLinnerの世界史第九卷(1916)A. Sternの歐羅巴史第七卷(1916)の出版を擧げ更に戰時獨逸史界に於ける主要なる刊行書紹介の筆を擱かん。〔植村〕

會報

評議員會　大正九年十月十一日午後四時より陳列館貴賓室にて評議員會を開き發行所の變更會費値上げの件を議決したり。

◉會員動靜

入會

京都帝國大學文學部史學科　杉本直次郎
同　中村喜代三
同　三喜田熊藏
（右紹介者、小牧實繁）
東京市本郷區眞砂町二五中村平作方　相田二郎
（右紹介者、平泉澄）
東京帝國大學文學部學生　羽深多中
（右紹介者、中島俊司）
山口縣立室積女子師範學校　新恭典
（右紹介者、鴛淵一）
東京府口暮里谷中元一〇三八　後藤守一
（右紹介者、入田整三）
新潟縣長岡市、互尊文庫　鷲尾敎導
名古屋市東區中市場町二丁目　樋口津彌太郎
名古市南區東町外土居四〇　寺澤重吉
（右紹介者、三浦周行）
新潟市入舟尋常小學校　大橋德四郎
新潟縣立村上中學校　栗原助作
（右紹介者、本山久平）
東京府北豐島郡高田雜司谷七二二　柳貫一

（右紹介者、押上森藏）

山形縣楯岡町中荒町　田邊一郎

（右紹介者、粟野秀穗）

大阪市北區新川崎御料地五號　江崎政忠

（右紹介者、岩井武俊）

岡山市小橋九二　志田義秀

岡山市岡山愛　岩崎孫人

（右紹介者、松本彦次郎）

「京都市間之町通下數珠屋町上ル　笹川新太郎

（右紹介者、天沼俊一）

鳥取縣西伯郡逢坂村　太田勝一

（右紹介者、猪熊信男）

東京本郷區森川町一　坪井忠彦

（右紹介者、植木直一郎）

退會

岡本直衛、西彦太郎、北峯順修、野村禮讓、加藤鉚次郎、大河內了悟、山田貞芳、金澤庄三郎、布施秀治、三國谷三四郎、

死亡

安松長一

●寄贈交換圖書

日本古代文化　和辻哲郎

伊藤仁齋と其教育　增澤淑

我樂百覽會誌　鹿島圓次郎

史學雜誌　卅一の九、十、十一　史學會

歷史地理　卅六の三、四、五　日本歷史地理學會

考古學雜誌　十一の一、二、三　考古學會

國學院雜誌　廿六の八、九、十、十一　國學院大學

飛驒史壇　九、十、十一　飛驒史談會

東洋哲學廿七の八、九、十　東洋大學

經濟論叢　十一の四、五　京都帝國大學經濟學會

六條學報　二二四、二二五、二二六、二二七、二二八　佛教大學

佛教學雜誌　一　小野玄妙

佛教大學通信講義　一の一　佛教大學出版部